

目 次

| | |
|--|----|
| 発刊の辞 袴田茂樹 | 3 |
| 審査委員長の講評 木村 汎 | 6 |
| サラエヴォに灯る希望の光：サッカーを通じた民族和解の試み 森田太郎 | 7 |
| はじめに | 8 |
| 1. 産声を上げたクリロ | 9 |
| 2. 帰ってきたサラエヴォ | 12 |
| 3. 「サッカーがしたい」という思いを胸に | 15 |
| 4. 境界線の重み | 21 |
| 5. 二人の挑戦者たち | 25 |
| 6. サッカーが持つ力の偉大さ | 26 |
| 7. パスがつないだ民族と民族 | 28 |
| 8. ボスニアの労働者たち | 30 |
| 9. 親たちの決意 | 33 |
| 終わりに | 36 |
| グルジア共和国における平和構築プロセス： 安全保障部門改革(SSR)を通じての考察 小山淑子 | 39 |
| はじめに | 40 |
| 1. 安全保障部門改革(SSR)とは? | 40 |
| 2. グルジアにおけるSSR | 43 |
| 3. SSR実施のさいの課題 | 51 |
| 結びにかえて | 55 |
| 中央アジア諸国における教条的民主主義： 「移行支援機構」をめぐる仮説提示のための覚え書き 湯浅 剛 | 57 |
| はじめに | 58 |
| 1. 「移行支援機構」と民主化 なぜ「教条的民主主義」が問われるのか? | 61 |
| 2. 「移行支援機構」と政治体制 なぜ教条的になるのか? | 63 |
| 3. 教条的民主主義の構成要素 | 70 |
| 結びにかえて 仮説と展望 | 73 |
| 会計報告 | 76 |
| 報告書執筆者紹介 | 82 |
| 編集後記 | 83 |
| 秋野豊ユーラシア基金について | 84 |

Peace and Conflict in Eurasia

Report of the Akino Yutaka Fellowship Programme

Vol. 1, 2001

Akino Yutaka Eurasia Fund

Contents

- Preface 3
 Shigeki HAKAMADA
(Professor, Aoyama Gakuin University, Tokyo)
- Comment from the Chair of the Prize Committee 6
 Hiroshi KIMURA
(Professor, International Research Center for Japanese Studies, Kyoto)
- Creating the Youth Football Club for Ethnic Reconciliation in Sarajevo 7
 Taro MORITA
(Representative of NGO "Sarajevo Football Project," Tokyo)
- Peace-Building Process in Georgia:
 An Analysis on Security Sector Reform(SSR) 39
 Syukuko KOYAMA
(Graduate Student, Bradford University, Bradford:UK)
- Dogmatized Democracy* in Central Asia: A Research Note to Frame
 Hypotheses on *Transition-Support Organizations* 57
 Takeshi YUASA
(Research Associate, the National Institute for Defense Studies, Tokyo)
- * * *
- Financial Reports from Recipients of the Fellowship 76
 Reporters' profile 81
 Editor's Note (Yoshikazu HIROSE) 83
 About Akino Yutaka Eurasia Fund 84

発刊の辞

袴 田 茂 樹

(秋野豊ユーラシア基金理事、青山学院大学教授)

日本政府から派遣され、国連職員としてタジキスタンで紛争解決の仕事をしているとき殉職された秋野豊氏の遺志をわれわれがどのように受け継ぐか、彼の尊い死を無駄にしないために何をすべきか、これが秋野豊ユーラシア基金の創設や運営に関わって来たわれわれの最大の課題であった。突然に秋野氏を失った衝撃と深い悲しみ、それもやがて時間が少しずつ癒してくれる。しかし、そのことは同時に、豪放さと繊細さの綾なすあの彼の人格と行動がわれわれに与えた強烈なインパクトも、時と共に風化してゆくということでもある。われわれには、秋野氏の大きく重い生と死を決して風化させてはならないという気持ちも強くあった。

では何をすべきか。このような課題や気持ちに応えるものとして、皆が一致して考えたことが、秋野氏の精神と仕事を受け継ぐ若い人材を一人でも多く育てるということであった。こうした思いを同じくする多数の方々の寄金をもとに、秋野豊ユーラシア基金が創設され、ユーラシアの地域研究や紛争解決の問題に取り組む大学生、大学院生などの研究を支援するために秋野豊賞が設けられた。今回の『秋野豊賞調査報告集』はささやかなものではあるが、優れた問題意識と計画によって秋野賞を受賞し、その賞金によって研究や紛争解決に取り組んだ若い3名の活動の報告集であり、その記念すべき第1号である。

この秋野賞を公募したとき、われわれは内容的にしっかりした研究や活動を行える者の応募がはたしてあるのだろうかという不安もあった。しかし、審査委員長の木村汎教授が応募作の講評で述べられた次の言葉がわれわれの気持ちをよく表している。

「率直に言って、嬉しい誤算だった。……ユーラシア地域における紛争を平和的な手段を用いて解決したり、発生を予防しようとする、政府、NGO、その他による努力。この問題に、若い世代の方々がこれほどまでの熱心な関心を寄せ、調査・研究に携わろうとしているとは!」

われわれは、秋野氏の精神を生かすということは実際にはどうということだろうかとはしばしば自問した。秋野氏という一般的なにはスポーツマンタイプの行動派あるいは野

人的な学者というイメージが強い。しかし彼はアカデミックな分析や理論構築にも独特の意欲と優れたセンスを有していた。そのことは、彼が残した論文や著作にはつきり示されている。したがって、当然のことながら、われわれはまず第1に、単なる文献研究ではなく、現地での調査や活動をしっかりと行うことを前提とした研究、活動を応援することにした。同時に、少なくとも研究者としての彼の志を継ごうとする者には、単なる行動派というだけでなく、分析や理論面でもしっかりした仕事をなし得る者を支援するべきだと考えた。

今回の3つの報告書は、このわれわれの期待に十分応えてくれていると信じている。

森田太郎君の報告は、旧ユーゴ地域での民族紛争の生々しい実態をいきいきとリアルに伝える、まさに体当たりの活動記録だ。率直に白状すると、森田君の計画書が提出されたとき、私は少年サッカーを通じて民族融和の活動を行うと言うのが、何か幼稚な思いつきの感じがして、秋野賞にはたして相応しいものかと疑念を抱いたものである。ふやけ切った日本から飽食した学生がこのこ出かけて行って、バルカンの民族問題の深刻で複雑な現実に対して一体何ができるかという思いもあった。しかし、報告書を読み始めて、私の認識の誤りにすぐ気が付き、赤面させられる思いであった。森田君の真摯な活動にも深く心を打たれたし、またその文章力にも感心させられた。秋野賞はそれに相応しいしっかりした人物を見出したと確信している。

小山淑子さんのグルジア現地調査は、もともと日本人にとって理解のしにくい地域の、しかも動乱期の極めて複雑な状況の分析だけに、貴重である。先年、シェワルナゼ大統領が訪日されたとき、私は彼と対談をする機会を得たが、彼も日本でグルジアがほとんど知られていないことを残念がっていた。小山さんは秋野賞の賞金によりグルジアで2ヶ月の現地調査を行い、グルジアの治安諸組織が、紛争後の社会で平和構築にいかに関与しているのかをテーマに、平和構築プロセスの行方を探っている。現地では地元のNGOを拠点にして、国際機関・グルジア政府関係者などにインタビューを行い、また、アブハジアや南オセチアなどからの避難民などからも、直接話を聞くことが出来たということである。このような地域研究が今後も若い世代によって積極的に遂行されることを期待したい。

湯浅剛君の研究報告は、中央アジアにおける「民主主義」の意義とあり方をめぐり興味深い考察である。この問題は、発展途上国における開発独裁や権威主義の問題とも関連している。また、ソ連邦が崩壊した後に生まれたCIS諸国において民主化や市場化という体制転換を推進する諸困難とも結びついている。私もウズベキスタン滞在中、社会全体の安定と政治的な民主主義の関連についていろいろ考えさせられた。これは、中央アジア諸国において最も難しく、また重要な研究テーマであろう。湯浅君は「教条的民主主義」という興味深い概念で、中央アジアにお

ける政治状況を説明しようとしている。「教条的民主主義」と言えば、私などは咄嗟に、「人権」や「民主主義」をドグマのように絶対化する米国を思い浮かべるのであるが、湯浅君のアプローチは、同じタームでも理解は別のようだ。

秋野氏もきっと、秋野ユーラシア基金によってこのような若い世代が育っていることを喜んでくれているだろう。

このような基金を運営し、秋野賞を選定し報告書を編纂する過程で、広瀬佳一氏をはじめとして事務や連絡を担ってくださった方々が、どれだけ神経を使い多くのエネルギーと時間を投じたかということを忘れるわけにはゆかない。それでも、今後少なくとも年に1度はこのような報告集を出せるよう、われわれもがんばってゆきたいと思っている。この報告書が、広く読まれることを、そしてそのことによって秋野氏がいつまでもわれわれの心の中に生き続けることを祈らずにはおれない。

2001年8月14日

審査委員長の講評*

率直に言って、嬉しい誤算だった。初回ということもあり、質量ともに入賞に値する応募が集まるか否か、一抹の不安感を抱いていたからである。私個人の認識不足も責められるべきかもしれない。中央アジア、それ以外のユーラシア地域における紛争を平和的な手段を用いて解決したり、発生を予防しようとする、政府、NGO、その他による努力。この問題に、若い世代の方々がこれほどまでの熱心な関心を寄せ、調査・研究に携わろうとしているとは！ 不覚にも、私個人が充分認識していなかったからだ。

審査過程で悩まされたのは、粒揃いの優秀な応募に順位をつけねばならない苦しみだった。とくに、「大学院生部門」では応募者全員をパスとしたいと思っただけである。しかし、それでは審査とならない。

主として以下の諸点を留意して、評価を行った。(1)目標が明確かつ具体的なものであるか。(2)現実的な成果が期待できるか。(3)たんなる机上の文献調査に過ぎないものか、現地へのフィールドワークが充分活用される調査研究であるのか。(4)予算活用の裏付けがあり、奨学金を充分生かすことが期待できるか。

なおかつ接戦だったので、秋野豊ユーラシア基金理事会の御支持と御承認を得て「大学院生部門」では、今回に限り例外的に二名の合格者を選ぶことにした。この選に洩れた方々も、是非気持を新たにして次年度に応募していただきたい。

秋野豊氏の偉業が決して彼一人で立ち消えるものでなく、彼に続く若い後進の人々が育ちつつある。このことを知り、審査員一同は満足感にひたされている。秋野氏も、あの特徴ある微笑みで「良し」とのサインを送ってくれているに違いない。

第1回秋野豊賞審査委員を代表して

木村 汎

(国際日本文化研究センター教授)

* ユーラシア紛争・調査プロジェクト「秋野豊賞」の第1回受賞者は、1999年12月1日、木村委員長以下、柴宜弘(東京大学教授)、立山良司(防衛大学教授)、袴田茂樹(青山学院大学教授)、村井友秀(防衛大学教授)の5名からなる審査委員会によって8名の応募者の中から選ばれました。この文章は、当時基金ホームページ掲載用に木村委員長からお寄せいただいたものです。(基金事務局)